幸せのカタチ

のんび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せのカタチ

【コード】

N08740

【作者名】

のんび

【あらすじ】

都会の片隅で暮らす、シングルままんの、涙とお笑いの記録…かもしれません。

1・始まりの日(前書き)

この物語は、都会の片隅でひっそりと暮らす、母一人子一人(+猫一匹)の、涙とお笑いに満ちた、一記録:かもしれない。

1・始まりの日

平成10年5月某日

すっきりと晴れ渡った初夏の青空をよそに、私の気分はどんよりと曇り空に覆われていた。

生理が来ない。

予定日を一週間も過ぎても、二週間過ぎても、来ない。

今までこんなに遅れた事はなかったのに…。

まさか…。

明日、検査薬を買って来よう。そうすれば、きっとはっきりとすることは…。

胸中に湧き上がる不安を、私は抑えることが出来なかった…。

目の前にある、一本の赤い線。

検査薬の反応は…予想通り陽性だった。

すぐに、当時付き合っていた彼に言った。

私が何度避妊をお願いしても、聞いてくれなかった彼。

それを許容していた私にも、勿論非があったのだけれど、その事について、彼は何も触れなかった。

そう、何も…。

ただ、困ったような顔をして、黙って私を見つめていただけだった。その時、なんとなく予感していたのかもしれない。

この人とは、いずれ別れる事になる事を。

私は社会人で、彼は、私より年下で、まだ学生だった。

彼は両親との関係が上手くいっておらず、よく一人暮らしの私のところに転がり込んでいた。

彼のご両親からしてみたら、私は息子を誑かした女という位置付けだったようだ。

何日も、何日も悩んで、悩み抜いて、出した結論。

選択肢によつては、これから先の私の人生は、苦勞の連続だろうと
いうのは、目に見えていた。

それでも、何かに導かれるように、私の中にやってきた小さな命を
消す選択は、私にはどうしても出来なかった。

今から思うと、それは神様から与えられた、人生の分岐点だったの
かもしれない…。

2・自覚

検査薬の陽性反応が出た次の日の昼休みに、会社から少し離れた場所にある、古びた産婦人科へ向かった。

今から考えると、何故そんな同じ会社の人の目に触れそうな医師にかかろうと思ったのか不思議だが、自分で思っていたよりも、内心はかなり動揺していたのだろう。

生まれて初めての産婦人科。

古びたドアの内部は、やはり古びていた。

患者さんは、私の他に誰もおらず、ひっそりとしていた。

無愛想な受付の年配の女性に差し出された問診票に、必要事項を記入していく。

問診票の用紙は、四隅が黄ばんでいた…。

この産婦人科、本当に大丈夫なのだろうか…。

内心かなり不安になりながら、昼間なのに薄暗い待合室の、赤いレザー張りの椅子に腰掛け、名前が呼ばれるのを待つ。

少しして、先程の女性の声で「相川さん、どうぞ」と私の名前を呼ばれ、診察室へと入った。

先生は、白髪が大分混じった、かなり年配の細身の男性だった。

丸い椅子に腰掛け、淡々と問診に答えていく。

一通り問診が終わり、側に置いてある初めて見る機械に、下着を脱ぐよう指示され、あつという間に座らされる。

正式名称は不明だが、いわゆる産婦人科の診察用の椅子である。

「五週間位かな。予定日は来年の一月十五日だね」

そこで散々生まれて初めて嫌な診察を受け、その日は仕事に戻った。

…あんな診察が、出産まで続くのか…。

もしかしたら、もっと嫌な検査とかもあるのだろうか…。

少し、出産について調べた方がいいかも知れない。

仕事帰りの駅前の書店で、出産専門誌の某大百科を買って帰ったのは、言うまでもなかった…。

3・迷い

私と彼と、お互いが目の前の現実から背をそむけるように過ぎていく日々。

話し合いたい私と、私が切り出そうとすると逃げてしまう彼。

その中で、私のお腹の中では、小さな小さな命が少しずつ成長して行った。

やがて季節は梅雨に入り、世の妊婦の方々が苦しめられるというつわりにも、私は幸いな事に全く縁がなく、今迄通りに仕事をこなしていた。

仕事内容が余り激しく動くことのない事務職だった事も幸いしたのだろう。

普段どおりに仕事をこなしつつ、私の脳裏を占めていたのは、今後への不安だった。

態度の煮え切らない彼。

いずれは、隠し様もない程巨大化する腹部。

そして、結婚もせず妊娠した事への、私に対する、周囲の視線。

それら全ての解決への糸口さえ見つからない。

いっそ、全てを無かった事にしてしまえば、楽になれたのだろう。

けれど、せつかく縁があつて授かった命。

私を選んでくれたこの子を、無くしてしまう事だけは、絶対にしなくなかった。

でも、本当にこの子を生んで、私はやっていけるのだろうか？

相反する感情に挟まれ、私はただただ立ち竦んでいた。

4・突き付けられた現実

私と彼は、つかず離れずの関係を保ちながら、季節は夏へと移って行った。

体も少し体重が増え、満員電車での通勤も徐々にきつくなっていく。駅までバスで20分、更に電車で30分の立ちっぱなしでの通勤に加え、夏の暑さは、気が付かない内に、私の体を蝕んでいった。

その頃になると、会社の同僚の視線のなかに、物言いたげなものが混じるようになった。

鋭い人は、どうやら気が付きはじめたらしく、徐々に私の耳にも噂が届くようになっていた。

そして、7月も終わりになる頃、親友の同僚からもたらされた決定的な言葉。

「相川ちゃん、妊娠してるんじゃないかって、噂になってるよ…どうするの?」

ついに来たかと思った。

そろそろ、上司に報告しなければならぬかも知れない。

それは、いずれ通らなければならぬ、決して避けられない道。

この子を育てる為には、仕事を無くすわけにはいかなかったから。

お腹の中の子は、分かっていたのだろう。そんな私の不安定な感情を。

その日、明日は報告しなければと思いつながら、シャワーを浴びるために服を脱いだ私の目に飛び込んだのは。

下着に着いた、多量の出血の跡だった…。

5・祈り

どうしよう、どうしよう、どうしよう…！

紅く染まった下着を呆然と見つめたままの私の脳裏に浮かんだのは、ただその単語だけだった。

それでも、何とかしないと、混乱する頭をなんとか働かせ、震える手で電話を掴み、彼の携帯に電話をした。けれど、彼は出なかった。

取りあえず、留守番電話に出血があったことを伝言し、のろのろと服を着た。

そして、震える指で119番をプッシュした。

生まれて初めて乗る救急車は、かなりの時間が経ってから到着した。アパートがかなり複雑に窪んだ場所にあった為、手間取ってしまったようだ。

夜も遅く、殆ど灯りのないこんな場所まで来てくれた事に、涙が出そうになった。

救急隊の方の手を借り、アパートの二階からゆっくりと階段を降り、救急車へと乗り込み、横になった。

走行中かなり揺れる救急車の中で、暫く受け入れ先の病院を探してもらい、程なく無事最寄の駅近くの産婦人科へ受け入れてもらえた。産婦人科へ向かう間、私はひたすら、お腹をさすり続けていた。

どうか、無事で…と。

6・白と黒の命

病院に到着し、連絡を受け待機していた看護婦さんに案内され、すぐに診察を受けた。

診断は「切迫流産」だった。

簡単に言うと、お腹の赤ちゃんが流れてしまうところだったのだ。

「今の所落ち着いてるから、栄養剤を点滴しながら暫く様子を見ましよう。」

との先生の言葉に、一週間程度入院する事になった。

先生によると、流れてしまうかどうかは、赤ちゃんの生命力にかかっているのです、今はこのまま様子を見守るしかないという事だった。

まだ不安は残ったが、ひとまず胸を安堵が過ぎった。

今まで通っていた会社近くの産婦人科では、エコーを見せて貰えなかった私は、

そこで初めて、エコーでお腹の子と対面したのだ。

黒と白で構成された画像は、素人の私では判別しなかったのだが、先生が丁寧に解説して下さった。

大きさは、約五センチ。心臓が力強く脈打っていた。

とくんとくん。

(ママ、大丈夫だよ。)

お腹の子が、そう言った様な気がした。

私は、溢れる涙を止める事が出来なかった。

7・暗闇の中で

病室に案内される前に、病院の待合室にあるピンク色の公衆電話から、彼に電話をした。

今度は繋がったので、彼に病院名と場所を簡単に告げ、着替えを持ってきて貰うように頼んだ。

暗い廊下を看護婦さんに案内されて着いた一人部屋の病室は、ホテルみたいに綺麗だった。

1日幾ら位かかるんだろうと内心心配をしつつ、手際よく取り付けられた点滴がボタンボタンと落ちるのを眺めながら横になった。

真っ暗な天井を見つめながら、明日は会社に電話して事情を説明しなきゃと思いつつ、目を閉じた。

…それともう一つ。

脳裏に浮かんだのは、もう何年も会っていない、両親の顔だった。

8・繋がるもの

もう、何年も足を向けていなかった実家。

父親は運転手をしており、かなりの酒飲みで、何かあると理不尽に殴られた記憶しかなく、母親は常に私を否定し弟を溺愛し、父親の暴力を見てみぬふりをした。

そんな両親は、私の全てを管理したがった。

小さい頃から、私は両親にとって、都合のいいモノでしかなかった。小学生の頃は、放課後は弟の世話と家事の手伝いに明け暮れた。友達に遊びに誘われても、断るしか出来ず、仲の良い友達は出来なかった。

中学に入学し、イラストを描くのが好きだった私は、勿論そういう部活に入りたかったのだが、帰りが遅くなるというだけの理由で反対され、寄り道も一切禁止だった。

逆らえば父に殴られるので、私はただ従うしかなかった。

高校を卒業と同時に、私は家を飛び出した。

就職先の寮に入り、その後は一切連絡を絶った。

今、あの人達はどうしているんだろう。

私の事を思うことはあるのだろうか…。

もう、何年も思い出す事のなかった両親の事を、何故か思わずには
いられなかった。

9・束の間…

切迫流産で入院した次の日、彼が着替え一式を持ってきてくれた。病室に入り、私の顔を見て、「具合はどう？」と訊いて来た彼に、私は、「取り敢えず大丈夫」と答えた。彼はそれに対して、「そうか」とだけ呟いた。

私は、彼に聞けなかった。

本当は、無事と知ってあなたはどう思っているのかと…。

入院している間、彼はよく私の様子を見に来てくれた。

だからこそ、彼の気持ちが見えなかった。

いつその事、全てを突き放して逃げてくれたら、彼の事を思い切れるのに…。

中途半端な優しさが、余計に辛かった。

昔、虫垂炎で入院した時に食べた病院食とは比べようもない程、産婦人科の病院食は、とても美味しかった。

感触のよいベッドで久しぶりにゆっくり休めたような気がする。

看護婦さん達にもとても良くして貰った。

点滴の途中で、管が外れ、血液が逆流して私も暫く気がつかなかったという

忘れられない事件もあったが、とても良い病院だった。

…結局、出産までこの病院にお世話になる事になった。

一週間入院し、退院の許可を貰い、彼に連れられてアパートに帰った。

翌日、出社し上司に急の入院のお詫びと、妊娠の事情を打ち明けた。詳しくは話せなかったのだが、お腹の子の父親とは暫く籍を入れない事、

出産するまでこのまま働きたい旨を伝えた。

上司は、部の皆でフォローすると約束してくれた。

同じ課の仲間も、皆応援してくれた。

すごく有難かった。

自分でも、出来る限り、無理はせずにぎりぎりまで仕事を続けよう。そう思った。

そんなある日、僅かにお腹に感じた違和感。

何かが動き出す予感。

体の奥深くから沸きあがった…それは、かすかな胎動だった。

10・遠ざかる足音

その存在を自己主張し始めた、小さな命。

モコモコと可愛らしく動くそれに、私は『モコ』と名付けた。

僅かに迫り出し始めたお腹を擦りながら、たわいもない事をお腹に向かつて話し掛ける。

会社であったことや、道端に咲いていた花、散歩の途中で出会った可愛い犬。

退院してからは、体重が少し増え過ぎる事を除けば特に問題もなく、順調な日々を過ごしていた。

七ヶ月を過ぎると、明らかに妊婦と分かる体型になった。

腹囲は急激に大きくなったが、職場の方々の協力もあり、仕事も普通にこなしながら、毎日が過ぎていった。

ただ、大きなお腹を抱えての通勤は、正直きつかった。席を譲って頂けた記憶は、長い妊娠期間で、たったの一度だけだった。

夜になると、お腹の重さで仰向けやうつ伏せでは眠れなくなった。

そして、私の身体の変化と共に、彼は私から徐々に遠ざかっていった。

11・決別

覚悟していた筈だった。

いつかこういう時が来るのは解っていた筈だった。

何も言わない彼が、子供を望んでいない事。それを解っていてなお、生むと決めたのは、私。

お前が勝手に決めただろうと言われてしまえば、勿論そうだとしか言えない。確かに、傍から見ても、私の決断は身勝手なのだろうと思う。

それでも、頭では納得していても、込み上げる感情は抑える事が出来なかった。

真冬の暗い静寂に包まれた、ストーブの消えた冷えきったアパートの部屋で、ただ一人。

その日、その時、ただ一度だけ。

私は、布団の中で蹲り、お腹を両腕で抱き締めて号泣した。

ごめんね、ごめんね、今だけはママを許してね。もう、二度と泣かないから。

やがて訪れる出産への不安を抱え、私は新年を迎えようとしていた。

12・焦り

問題は、目の前に山積していた。

40万円近い出産費、及び当面の新生児用品一式。

今のアパートは独身専用の為、出産後の新居はどうするのか。…等々。

取り敢えず、諸々の問題は徐々に考えるようにして、まずは無事に出産を終える事に集中する事にした。

少しでも諸費用を稼ぐため、年末休暇前ギリギリまで働き、職場の皆に温かく見送られ、産休に入った。

その頃になると、腹囲は90センチを超え、足元は全く見えなくなり、体重も70キロを超え、予定日までまだ日にちはあったが、いつ産まれてもおかしくない状態になっていた。

ちなみに、かなり制限に気を遣っていたにもかかわらず、平均に比べかなり体重が増えていた。

出産に備え、毎日散歩し、なるべく身体を動かす様にしていた。

ところが。

出産予定日を何事もなく迎え、やがて予定日を十日過ぎても、一向に生まれて来る気配はなかったのだ…。

13 嵐の前

定期健診でも、数値にも特に異常は認められず、エコー検査でも問題はなかった。

予定日は、あくまでも予定なので、心配しないようにと先生は仰つて下さったのだが、やはり不安は拭えなかった。

ただ、余りにも陣痛が来ないようなら、陣痛を促す薬を使いましょうとの事だった。

2月に入り、遂に腹囲は100センチを超え、今にもち切れんばかりになった。

元々50キロ前後だった体重が20キロ以上増え、歩くのもやつとの有様だ。

このままだと、帝王切開もあり得る為、次の健診の結果如何では、人工的に陣痛を誘発する事も考えましようとの事だった。

私に出来たのは、ただ祈る事だけだった。

お願いだから、出て来て…！

果たして、その声が届いたのかは定かではなかったが、それは、微かにやって来た。

腰に走る、小さな痛み。

徐々に激しくなっていくそれは、誕生への足音だった。

14・想定外

最初は自分でも気が付かない位の僅かな腰の痛みが、時が経つにつれ徐々に激しい痛みに変わっていく。

気のせいかなと思っていた痛みが、陣痛だと漸く気が付いたのは、痛みが始まってから約五時間経った頃だった。

自分でも余りの鈍さに呆れたが、何分初めての経験で、陣痛がどんなものかも、良く分かっていたのだ。

その症状は、かなり人によって個人差があるらしく、私のは、骨盤と背骨の繋ぎ目

辺りがズキズキと痛かった。

ただただ痛かったとしか言い様がないのだが、ただ痛いだけではなく、

痛みと痛みの間に、休める時間があるのだ。

例えるなら、波線の一番高い位置が痛みで、それが下に向かって引いて行き、

また上つていく感じなのだ。

最初は緩やかだった間隔が、数時間経過し、やがて約五分程になった時、

漸く私は行き着けの産婦人科に電話をかけた。

時計は、夜の十時を回っていた。

すぐに向かっても良いものとはかり思っていた私に

対応に出た看護師の言葉は、想定外のものだった。

そのまま、自宅で待機し、朝まで様子を見るように言われたのだ。

こんなに痛いのに？五分間隔になったら、すぐ電話を下さいと言っ

たのは、

そっぢじゃないのか!?

取りあえず痛みを訴えたものの、結局何故だかわからないうちに
看護師に言いくるめられ、朝までひたすら腰をさすりながら、
激しい痛みを絶え続けるしかなかったのだ。

15・ついに迎えた日

痛みに耐え続けた、永遠に続くかと思われた長い一夜がようやく明け、漸く病院に向かうことになった。

前回の切迫流産の時に、タクシーを呼んでも来ないのは分かっていたので、また救急車を呼ぶ事にした。

ヨロヨロと救急車に乗り込み、結構激しく揺れる車体に揺られながら、約二十分程で病院に到着した。

病院に着いてすぐに診察室に直行し、検査をした所、既に子宮口が8センチ開いているとの事で、病室ではなく陣痛室に直行となった。陣痛室とは、赤ちゃんを産む分娩室の手前にあり、分娩出来る状態になるまで待機する部屋だ。

すぐに分娩用の服に着替えさせられ、分娩監視装置という機械を取り付けられ、子宮口が全開するのを待つ事になった。

看護師さんに、陣痛を促す薬を注射され、ベッドの上で腰をさすりながら耐えていたのだが、お隣の分娩室では、丁度その時他の妊婦さんの出産の真っ最中で、妊婦さんの絶叫が聞こえてきた。

痛い、もう出して！という妊婦さんに、痛いつて言わない、赤ちゃんだつて頑張つてるのよ！と看護師さんの声が飛ぶ。

それを聞いた私は、絶対痛いと言わないと心に誓った…。

絶叫は出産終了まで続いたのだった。

やがて、私は看護師さんに支えられて、分娩室に移動した。

誰かに見守られる事もなく、ついに私の出産が始まるうとしていた。

16・やっと逢えたね

午後二時、遂に分娩が始まった。

分娩室に入って直ぐにお腹の中の羊水（赤ちゃんを包む水）が流れ出し、本格的に分娩が始まった。

一分置きに襲う痛みには耐えながら、分娩台の取っ手を思いつきり握り締め、助産婦さんの合図と同時ににお腹に力を入れる。

それと同時に、四人の看護師さんと助産婦さんが、同時にお腹を押し、赤ちゃんが出てくるのを促す。

それでも、巨大な私のお腹の中から、赤ちゃんは中々現れなかった。頭の部分は見えているのに、そこから全く出てくる気配がないのだ。どうも、赤ちゃんが予想外に大きく、私の骨盤の中で赤ちゃんの肩が引っかかっている、出てこれなかったのだ。

息を吸って、吐いて、いきんでを延々と繰り返し、時間だけが過ぎていく。

陣痛が始まってから、吐き気で何も食べられなかった私の体力も、限界に近づいていた。

分娩開始から約一時間後、最終秘密兵器が登場した。

赤ちゃんの頭に吸い付いて出産を補助する「吸引カップ」である。カップの部分で赤ちゃんの頭に吸い付かせて、旋回しながら出てくる赤ちゃんに合わせて引っ張り出すのだ。

最後の力を振り絞り、いきんだ次の瞬間、お腹の圧迫感が一気に軽くなり、一気に力が抜け…。

一瞬、周囲の音が全て途切れた。

そして、甲高く響き渡る、新たな生命の証。

元気な産声を響かせ、漸く…漸く、赤ちゃんが誕生した。

平成十一年二月某日、午後四時。陣痛開始から約十六時間後。
私の娘は誕生した。

体重は四千グラムを遥かに超えた、大きな女の子の赤ちゃんだった。

怒濤の出産の翌朝、三人部屋の病室から少し離れた場所にある新生児室へと向かった。まだ早朝だったせいか、他に人影はなかった。新生児室横にある看護師さんの部屋に声をかけ入室した。

横に細長い新生児用ベッドには、十人程の産まれたばかりの赤ちゃん達が等間隔に寝かされていた。

その中でも、頭一つ分は大きな赤ちゃんが、私の娘だった。

五体満足で産んであげられた事にほっとしたものの、胸中は不安でいっぱいだった。

本当なら、喜びに満ちあふれている筈なのに…。

温かく柔らかい我が子を抱き上げて、そっと頬を合わせた。

不甲斐ない自分に、思わず涙が出た。

午後になって、彼が姉に付き添われてやってきた。

昨夜のうちに、産まれた事を連絡しておいたからだ。本当は、連絡するつもりはなかったのだが、彼にも知る権利があるだろうと思いつ直したのだ。

顔も見たくなかった。出来れば、二度と会いたくなかった。

出産の前、最後に会った時に言われた言葉が、彼の全てを物語っていたから。

『シングルマザーのサイトとかもあるし、そこで仲間を見つけられればいいよ。相談にも乗ってくれるしさ』

案の定、彼は私の腕の中にいる自分の子を見ても、何の感慨も沸か

ないようだった。

彼のお姉さんと話し、認知はしてもらう事を約束した。彼のご両親は、遺伝子検査をすると騒いでいたらしいが、お姉さんが止めてくれたらしい。

帰りぎわに、お姉さんが謝ってくれた事が救いだった。

やがて夜になり、私は真つ暗な受付のそばにあるピンク色の公衆電話の前で、十円玉を握り締めていた。

ゆっくりと受話器を取り上げ、ダイヤルを回した。

ワンコール、ツーコール…

『もしもし？』

『…お母さん、私、赤ちゃんを産んだの』

18・初めて気づくもの

数年振りに実家に電話した翌日、朝一番に両親が病院へとやって来た。

久し振りに会った両親は、私の記憶の中の姿よりも、随分と老けて見えた。

暴力と恐怖とで抑えつけられていた日々。その記憶は、年月が経ってもそう簡単には消えるものでは無かったけれど、怯える心をほんの僅かな勇気に変え、どんな罵声を浴びせられてもいいと覚悟していた私に掛けられた言葉は、予想だにしないものだった。

『馬鹿だな、お前は…でも、一人で良く頑張ったな』

ぼつりと呟かれた、温かな父の言葉に、思わず見開いた私の瞳から、堰を切った様に涙が溢れ出した。

ただ一度涙したあの夜から、精一杯の虚勢を張り、決して負けないと自分自身に言い聞かせてきたけれど、心の底に溜まり続けた一人で産み育てる事への不安は、誤魔化す事は出来なかったのだ…。

肩を震わせ、声を殺して泣き続ける私の頭を、母親の優しい手がそつと触れた。

それは、生まれて初めて私を感じた、両親の優しさだった。

後から母に聞いた話によると、私から電話を受け取った一週間位前に、不思議な夢を見たという。

私が赤ちゃんを抱いている姿が夢に出て来たというのだ。

それを聞いて、親子というのは、どこか目に見えない深い所で繋が

っているのかと思った。

妊娠して以来、漸く感じられた安堵の瞬間だった。
それは、次の嵐がやって来るまでの、束の間の…。

19・新たなる始まり

出産後五日入院し、退院後暫くの間、実家にお世話になる事になった。

今まで住んでいたアパートが独身者専用だった為、戻ることが出来なかったからだ。

古びた公営団地の中にある、数年振りに戻った我が家は、全くと言っていい程、変わってはいなかった。

両親は、まだ心の整理も出来ていないにもかかわらず、色々と準備してくれた。

真新しいベビー用布団に哺乳瓶、肌着や洋服、紙おむつなど様々な必要品を揃えてくれた。

私も出産前にある程度は揃えていたのだが、産まれた子が予想外に大きかった為、それらの品物が全て使うことが出来なかったのだ。

実家のある公営団地は、私が小学生の時に引越してきて以来、ずっと住んでいた場所だったので、周囲の人間は殆どが昔からの知り合いだった。

急に産まれたばかりの赤ん坊を連れて帰ってきた私の事を、陰で変な目で見る人はいたと思う。

両親、特に母は、私のいない所で、色々言われたと思うが、それを私に言うことは一切無かった。

そして、帰ってきてすぐに、新たな試練がやってきた。

実家に戻ってきて最初の夜。

深夜十一時、寒さも厳しい真冬の静かな夜空に響き渡った、切り裂くような泣き声。

それは、どこまでも果てしなく続く、睡眠不足との長い戦いの幕開けだった。

20・限界を超えて

一日の平均、二時間。

それが、子供が生まれてからの、私と両親と弟の睡眠時間だった。それも、まとまってとれる事は稀で、赤ちゃんが眠っている僅かな時間に、うつらうつら横になる状態だった。

赤ちゃんが起きている間は、抱っこしたりあやしたりしながら、オムツを替えたり、哺乳瓶を消毒したり家事を、母と手分けして一緒にこなす。

更に、連日深夜十一時から明け方二時までの、激しい夜泣き。抱いても、なだめすかしてもどうしても止まらないそれが、私達の精神的・肉体的疲労を倍増させていた。

分かり易く例えるなら、月四百時間労働し、常に精神的重圧をかけられるようなものかも知れない。それが新生児を育てている母親の現状なのだ。

まだ手伝ってくれる母がいた私はなんとか乗り越えられたが、一人きりで育てていたら、どうなっていたか分からない。

フラフラになりながらも、なんとか日々を乗り切っていたそんなある日、彼の両親と彼が私達を訪ねて来た。

彼の両親は、言葉には出さなかったが、はっきりと私達を見下していた。

特に彼の父親は、鼻を鳴らして、自分の孫を見下していた。孫とは認めていなかったのだ。

さすがに、息子とそっくりな顔を見て、遺伝子検査を言い出す事は

なかったが。

座った途端、出産費用だと、テーブルの上に投げ捨てられた数十枚の札束。

そして、黙って俯いたままの彼。

それを見た瞬間、この人達とは相容れない事がわかった。

お札を纏め、丁寧に揃えてお返しし、認知と幾らかの毎月の養育費以外は結構ですと固辞した。

結局、認知の件は何とか決着が付き、取り敢えず話し合いは終わった。

気力だけで過ごす日々、漸く終止符が打たれたのは、三ヶ月の産休が終わり、私が職場復帰した時だった。

あんなに凄かった夜泣きが、その日からピタツと止んだのだ。

それから少しの間は、穏やかな日々が続いた。

新たな転機が訪れたのは、その後だった。

21 先にたたないもの

娘　モコは、毎朝目覚める度に、大きくなっていった。

戸籍上、ちゃんとした名前はあるのだが、この胎名で過ごした期間が長かったせいか、ついこちらの名前で呼んでしまうのだ。なので、こちらで通わせて頂こうと思う。

朝九時から夕方六時までフルタイムで働き、夜は家事の手伝いと子供の世話をし、季節は慌しくあつという間に過ぎていった。

正直、その間の事は、毎日を生きる事で精一杯で、あまりよく覚えていない。

覚えている事といえば、初めてつかまり立ちをした日の事と、可愛い前歯が生えた時の事くらいしかない。

初めて喋った言葉さえ、日々に忙殺されて覚えていない有様だ。出来ることなら、モコの、全ての初めてを覚えていたかった。

もう少し、心と体にゆとりがあったら、周りを見渡す余裕があったなら…今になって、そう思う。

実家にいつまでも居候しているわけにも行かず、モコが一歳を迎えた頃に、近所のアパートへと引っ越した。

五階建ての古いアパートだったが、私達にとっては、十分なお城だった。

ただ、エレベーターが無かったため、暫くはモコを抱きかかえて上げなければならず、図らずも筋力を鍛えることになった。

引越と同時に四月に、保育園に通いだした。ずっと側にいたい本音と、働かなくては食べていけない現実に板ば

さみになりながらも、私は私の出来る事をするしかなかった。そんな時だった。

五月の給料日、会社帰りに寄った銀行で通帳記入した私は、目を疑った。

給料が振り込まれていなかったのだ。
しかも、社員には何の事前連絡もなしに。

会社の経理課に所属していた私は、会社がどういう状態にあるか、正確に把握していた。

仕入先からの請求を五ヶ月以上放置し、支払いの催促の電話が来ると、担当者不在を口実に引き伸ばし、拳句の果てに六ヶ月期日の手形で払う。

そして、余りの社内の規律と待遇の悪さで、約百人の社員の約半数が、一年で入れ替えになる…。

私が勤めていたのは、そういう会社だった。

遂にここまで来たか…。

通帳を見たときの、それが私の正直な感想だった。

結局、給料は十日後に無事に振込まれたが、一度芽生えた会社への不信感は、消える事はなかった。

それからは、即断だった。

私にとっては、仕事はとてまやりやすい会社だった。

けれど、これからの生活を考えると、こんな不安定な会社でとても勤め続ける気にはなれなかった。

私は、長年勤めた会社を退職する事を決意した。

次がすぐに決まるわけもない事は、わかっていた。けれどもこの後、現実私の想像を遥かに超えて、突きつけられる事になる。

22・高き壁

退職する前に、新しい職場を探さなければならぬ私の前に、思いもかけない壁が立ち上がった。

税金の『寡婦控除』制度である。

年末調整の時に書く用紙を見ていただくと分かるのだが、次に当てはまる人は、税金の控除が受けられるのである。

(1) 夫と死別し、若しくは離婚した後婚姻をしていない人、又は夫の生死が明らかでない一定の人で、扶養親族がいる人又は生計を一にする子がいる人です。この場合の子は、総所得金額等が38万円以下で、他の人の控除対象配偶者や控除対象扶養親族となっていない人に限られます。

(2) 夫と死別した後婚姻をしていない人又は夫の生死が明らかでない一定の人で、合計所得金額が500万円以下の人です。この場合は、扶養親族などのは要件はありません。

要するに、夫と離婚や死別、もしくは生死不明な場合は、税金の控除が受けられるが、未婚の母の場合は当てはまらないのである。

それがどういふ事かというところ、サラリーマンである限り、この寡婦控除制度がある為に、自分が未婚で子供を生んだ事を会社に申告しなければならぬのだ。

寡婦控除を受けられない私は、その旨を面接の時に告げた。

すると、面接官の視線が見る見る変わった。蔑みの眼差しに。

結婚もせずに子供を生んだ、ふしだらな女 と。

ある面接官からは、あからさまに尋ねられた。

『父親はどうしたのですか、不倫ですか？』

仕事の能力とは全く関係の無い事で、なぜこんな屈辱を受けなければならぬのか。
ただでさえ、小さな子供のいる母親は、採用されにくい。
なのに……。

未婚の母親は、国民を守るべき法によって差別されているのだ……。

とても、仕事を選べる状態ではなかった。
何社も何社も面接を受け、やっと決まった職場は、主要交通機関の無い、自転車で片道四十分の職場だった。

23・明日へ、未来へ

光陰矢の如しとはよく言ったもので、モコと過ごす日々はあっという間に過ぎて行った。

モコは小学六年生になった。

ついこの間入学式をやったばかりのような気がするが、それだけ駆け足で生きて来たという事だろう。

その間には、辛い事、苦しい事もあったが、それよりも楽しい事がずっと多かった気がする。

彼女は私の前では顔に出さないが、普通の子よりもずっと我慢や苦労をさせて来たと思う。

一日中外で仕事をしている為、行ってらっしゃいと送り出すことも出来ず、お帰りなさいと迎えることも出来ない。

手の込んだ夕食を作ることも出来ず、普通の母親らしい事は何も出来ずに来た。

そんな駄目な母親でも、彼女は笑って言うてくれる。

『ママ、大好き！』と。

後ろ指をさされ、陰口をたたかれた事は数知れない。

けれども、私は彼女を生んだ事を一度も後悔したことはない。

モコが小学校低学年の頃に、言うてくれた言葉がある。

人の死について徐々に分かりはじめた頃、親しい人が亡くなり、その事について会話していた時だった。

『いつか死んでも、私、また、ママから産まれない』

涙が止まらなかった。

この言葉だけで、生きていける。そう思った。

これからも、私たちの生活は続いていく。

また思いがけない出来事が沢山起き、思い出も積み重なっていくだろう。

二人で笑いあって生きていけたらいいと、ただ思う。

まだ真っ白な未来へのノートを前に、今はこの辺でペンを置くことと思う。

23・明日へ、未来へ（後書き）

長い間お付き合い頂きまして、ありがとうございました。
何か皆様の心の片隅に残すことが出来ましたら、嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0874o/>

幸せのカタチ

2011年1月17日20時36分発行